

追悼

西村暉希先生のご逝去を悼む



日本火山学会員、雲仙岳災害記念館調査研究部長 西村暉希先生は、2005年9月29日、長崎県大村市内の病院で逝去されました。63歳でした。

地質学の世界では、高等学校の地学教師に名伯楽とも言うべき人たちが存在することは良く知られています。故西村暉希先生もそのような名伯楽のお一人でした。先生は長崎大学学芸学部ご卒業の後すぐに、県立長崎北高等学校で12年間にわたり地学部を指導され、その中から多くの研究者と教育者を輩出しました。百武彗星の発見で世界的に有名になった故百武裕司氏、堆積学の宮田雄一郎氏(山口大学)、変成岩岩石学の西山忠男氏(熊本大学)、自然地理学の平井幸弘氏(専修大学)、文化人類学の八木祐子氏(宮城学院女子大学)など先生から学恩を受けた者は多く、その分野が多様であるのも先生の幅広い学問的関心を反映しています。長崎北高地学部の指導に当たっては、地質班、気象班、天文班を中心に全員がどの活動にも参加できるよう配慮されていました。ここに当時の地学部員の話を書いて、西村先生をしのびたいと思います。

先生は高校生である私たちを、本物の研究者に触れさせる機会を多く作って下さいました。地学部の部屋に、地質調査所の松井和典先生をひょっこり連れて来られることがありました。先生は図幅調査に来県される松井先生や服部仁先生と懇意にされ、一緒にフィールドを歩いたりして、知見を深めておられました。また島原巡検を企画され、九州大学温泉研究所(当時)の太田一也先生をお尋ねしたこともありました。壱岐で産出したステゴドン象の化石を長崎大学に見学に行くと、思いがけず松本征夫先生が説明して下さいました。長崎県地学会の巡検では、鎌田泰彦先生(長崎大学)を紹介して下さいました。私たちは巡検の間中お二人の先生の後をついてま

わり、大学教授も雑談されることを発見し大いに驚きました。高校生の時からこのような知的刺激を与えてもらえば、志が高くなるのも当然といえるでしょう。

先生ご自身も多方面の研究をなさっておられ、そのことから得た直接的刺激も大きいものがあります。たとえば雲仙岳の火山地質・地形に関する研究(西村暉希, 1982, 雲仙岳の三峰—普賢岳・国見岳・妙見岳—の生成史. 長崎県地学会誌, 37号, 13-26.)やビーチロックの研究(西村暉希, 1970, 長崎県の beachrock (1): 西彼杵郡野母崎町にみられる beachrock 脇岬礫岩. 長崎北高論叢, 1, 1-18.)などは現地でも直接説明を受け、感動したものです。島原大変大地図(西村暉希, 1980, 島原大変大地図. 長崎県地学会誌 33・34号.)では島原高校に保存されていた島原大変図(現在島原図書館蔵)を発見し、その資料的価値を公表しました。その10年後に雲仙の噴火が始まったのです。

山口大学の宮田は、高校時代に地学に魅せられ、毎週のように長崎県内のあちこちを巡検しました。そんな地学のおもしろさを体験させてくれたのが西村先生でした。特に先生の人柄に憑かれた生徒が多く、決して説教などされることはないのに、うまく乗せられてしまい、いつの間にか引き込まれていくところがありました。

熊本大学の西山に大きな影響を与えたのは、西彼杵半島神浦ダム周辺の地質に関するご研究でした。昭和40年代、西彼杵半島中央部に建設された神浦ダムの工事現場に先生は一早く足を運ばれ、周辺の地質図を作成されました。先生が採集されたダムサイトの岩石標本の中に、ひときわ美しい藍閃石を含む石英片岩があり、西山はその岩石にすっかり魅了されたのです。先生はその藍閃石片岩の重要性を高校生の西山に説き、それがきっかけで変成岩岩石学に目を開くことになったのです。後日、西彼杵半島の変成岩類の研究成果を地質学論集に発表した際に、この神浦ダム周辺に関しては西村先生の教えをそのままの形で利用させていただいており、謝辞では済まされなくらいのご恩を受けました。

西村先生は一時期、県教育委員会に務めておられましたが、この間に特筆されるべき業績を上げられました。それは隔年で一人、地学科出身の新任教員を採用するという方針です。これにより長崎県高校地学界は新しい血を確保できたのです。高等学校の理科教育の現場で地学が不当に低い扱いを受けている現状にあって、先生のご

努力がいかに重要であったかは言うまでもありません。このように長崎県教育界に貢献された先生の思いは、橋貞幸氏（長崎市教育研究所所長）、川原和博氏（長崎西高校：火山地質学）、寺井邦久（長崎県教育センター：火山地質学、気象予報士）、田中 勝氏（長崎市立山里中：第四紀学）ら、長崎北高時代の直接の教え子によって引きつがれています。先生は長崎県教育界に実に大きな果実を残されたと言うべきでありましょう。

平成 14 年に佐世保南高校長を最後に教育界を退かれた先生は、雲仙岳災害記念館の調査研究部長の要職に就かれ、故郷島原の火山研究に思う存分打ち込んでおられました。太田一也先生の後を継がれた九州大学地震火山観測研究センターの清水洋教授らセンターのスタッフとも懇意にされ、平成噴火を記念して作られた同記念館の企画展示にも尽力されました。九大地震火山研究セン

ターや雲仙岳災害記念館に設置されている雲仙普賢岳直下の震源分布を立体的に示す模型の考案者は、先生であります。先生の本領は、アイデアと器用さを生かして難しい地学現象を分かりやすく高校生や一般の人に解説できるところにありました。

管理職から開放され、これから思う存分雲仙岳の研究に打ち込もうと思っておられたであろうに、先生にとって自由な時間はあまりにも短いものでした。しかし先生のもたらされた果実はやがて次の種を生むことでしょう。次の種はそれと知らず新しい花を咲かせるでしょう。こうして人の営みは、先人を忘却の彼方に置き去りにしながら、確実に先人の貢献を受け継いでいくのでしょう。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

（記 寺井邦久，地学部員）